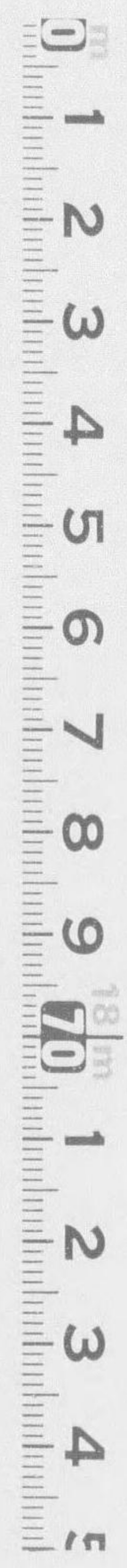


精神療法講義録

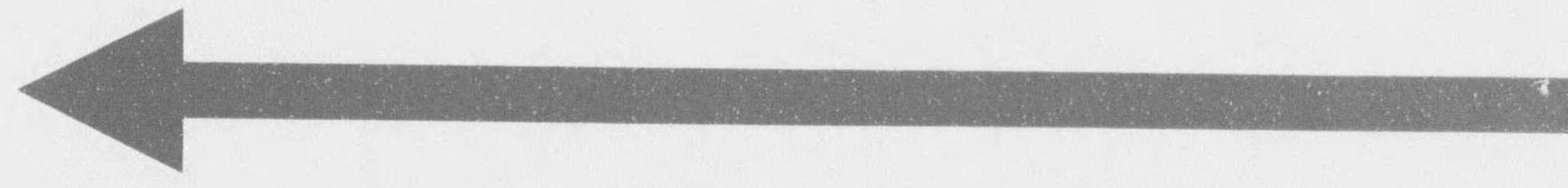
第參輯

X 複写

~~850~~
~~277~~



始



精神療法講義録

第參輯

X

X

1704
40

行104
40

古屋鐵石講述



精神療法講義錄

大正
8.2.1
第1卷第1輯

東京精神研究會

精神療法講義

第三輯目次

第十三卷	人身マグネット療法	一五九
第一章	人身マグネット療法とは何ぞや	一五九
第二章	人身マグネット療法の原理	一六二
第三章	人身マグネット療法を行ふ法	一六五
第十四卷	信仰療法	一六九
第一章	信仰療法とは何ぞや	一六九
第二章	自力信仰療法の原理現象	一七〇
第三章	他力信仰療法の原理現象	一七四
第四章	信仰療法を行ふ法	一七七

目

次

一

第十五卷 クリスチャンサイエンス療法……………一七九

第一章 クリスチャンサイエンス療法とは何ぞや……………一七九

第二章 クリスチャンサイエンス療法の原理……………一八〇

第三章 クリスチャンの療法的奇蹟……………一八二

第四章 クリスチャンサイエンス療法を行ふ法……………一八九

第十六卷 大靈道靈子術療法……………一九三

第一章 大靈道靈子術療法とは何ぞや……………一九三

第二章 顯動作用を起さす法……………一九五

第三章 潛動作用を起さす法……………一九八

第四章 田中守平式靈子術療法……………二〇〇

第五章 古屋鐵石式靈子術療法……………二〇一

第六章 新聞記者の實驗せる靈子術療法……………二〇三

第十七卷 哲理療法……………二〇九

第一章 哲理療法とは何ぞや……………二〇九

第二章 鈴木美山式哲理療法……………二一一

第三章 古屋鐵石式哲理療法……………二一五

第四章 雑誌記者の批判せる哲理療法……………二一七

第十八卷 靈智學隱秘教療法……………二二一

第一章 靈智學隱秘教療法とは何ぞや……………二二一

第二章 靈智學隱秘教療法を行ふ法……………二二三

目次終

爲せば成る爲さねば成らぬ何事も
 成らぬと云ふは爲さぬなりけり
 何事も飲んで掛れば鯨なり
 飲まるゝときは鰯とぞなる

第十三卷 人身マグネット療法

第一章 人身マグネット療法とは何ぞや

磁鐵礦と電氣
磁石

マグネットとは磁石の英語である。元來は鐵を吸引する性質ある天産礦物、即ち磁鐵礦の事であるが、今は弘く同様の性質を人工的に鋼鐵に帶びさせ、これをも磁石と稱する。従つて天然磁石、人工磁石の稱がある。然るに絶縁した導線を軟鐵の棒の周圍に捲き、導線に電氣を通ずると軟鐵にはもとより絶縁せられてあるから電氣は通じないが、それが一時磁石の性質を帶びて前記の天然磁石又は鋼鐵磁石に數千倍の強力なものとなる。しかも導線の電氣を止めると直にその磁石作用を失つてしまふ。これを電氣磁石(エレクトリック)トリック、マグネット)といふ。電氣學の方では普通に略して單にマグネットと呼んでゐる。これは電氣工學の上で極めて應用が廣く、電鈴、電話、電信の如きものから、發動機、發電機等の製作に用ひられてゐる。

マグネットの力は目に見えざるも其強力なるものになると、人身又は厚き書冊若くは硝子を貫通して鐵に影響を與ふる、即ち鐵を吸引する、其吸引力の大なるものになると、人間が數名乗れるエレベーターを上下せしむる力を有する。

男女の吸引力

人間の身體にも又マグネットの力がある、併し電氣學に云ふマグネットとは其性質を異にし、疾病を癒す力がある、男子と女子と各其皮膚を接觸すると異様の感起す、之れ即ちマグネットの作用であると思ふ、術者の精神が修養によりよく統一するとマグネットの力が益々大となり、術者のマグネットが、患者の患部に通じ、患者の血液の循環をよくし、呼吸を整調ならしめ、空中の酸素を攝取して血液を清淨にし、新陳代謝の機能をよくして其患部を治すると云ふのが此療法の根柢である。

メスナル氏の履歴

マグネット療法の開祖とも見るべきメスメル氏は、西歴一千七百六十六年の頃の人にして、獨逸國の一醫士である、氏は來因河の上流なる一貧家の子であつたが、幼にして法律學文學を修め、且つ天性頗る哲學を好み、成人して

メスメリズムとは何ぞや

後醫學を修め醫士となり、埃國瑞西等に遊學し、醫業を営み、傍天文星辰の學を究め、晩年専ら動物磁氣を研究した、動物磁氣とはメスメル氏が研究し出したるを以てメスメリズムの名がある、最初メ氏はバラセルサス氏の主張せる占星術の理によりて動物磁氣を考へ出した、即ち日月が汐の満干に影響すること及び磁石と鐵との關係を考へて、磁石と鐵とを用ひて疾病の治療を試みたるに、意外の効果を現はした、よりて益々其療法を行ひ居る中に治療の效果ありしは磁鐵の效力にあらずして、人體内に包藏せられ居る磁氣力が患者に傳はりて病氣が治するものであると考へ、磁鐵を用ひずして患者の患部に手を當て撫でたるに同じく治療の效を奏した、其原理は術者の手より動物磁氣が患者に傳はりて病氣が治するものであると考へた、其學理的説明の大意に曰く、宇宙間にはエーテルよりも更に精緻なる一種の瓦斯體が充滿して居る、今術者が患者の身上に心力を凝めると、術者の體內より磁氣が発生し、此れが件の精微なる瓦斯體に影響して一種の活動を惹き起し、該活動が患者の體内に通じて爰に感應の現象を呈することは、恰

動物磁氣の原

も天體が吾人に一種の影響を及ぼすと同じである、斯くの如く人々相互の間にも磁氣の感應あることは恰も磁石と鐵とのそれに異ならぬ、吾人は此作用によりて能く他人の心身に影響を與へ、或は遠隔地に在る患者をも居ながらに治療することが出来ると主張せり、後此説に反對したる學者出で、其治療の効果は患者の豫期心によるとのみ考へたが、今日は又元に戻りて術者の體内にあるマグネットが患者に影響するものであると考へた、併しマグネットとメ氏の主張せる動物磁氣とは似て居るも、全然同一のものとは見ないのである、此療法を行はんとするには術者は先づ肉食を斷ちて朝夕冷水浴をなし、神佛を祈り、肉體を無感覺となし得る修養を積むを要す、即ち術者の耳を強力の人來りて全力を注いで引くも、術者は少しも何等の感覺なき迄に修養して後行はざれば眞に效力を擧げ難い。

第二章 人身マグネット療法 of 原理

凡そ天地間にある動物と植物とを問はず、悉く其發育は造化自然の力に

よりて支配せられざるものはない、苟も自然力に背き、其調節を誤るときは到底完全に發育せぬことは、現に吾人人類に於て最も著しい、吾人が日常衛生を保全し健康を維持して、天賦の幸福を全うするを得るは、皆自然生理の力に支配せられて居る、各種の疾病は其調和を缺きたる表徴と見ることが出来る、天地の氣は四時循環して滯らぬ、之れ百物がよく發生する所以で、人身にあつても亦然りである、血氣循環して滯らなければ病に對する抵抗力が強く、疾病に犯さるゝ患ひがない、然るに近時病人の益々多くなるは、其本理を没却して、徒に總てを物質化せんとする弊の結果である、故に近來自然療法を稱揚する傾向を來せるは、之れ時代の要求で、實に人類の幸福と謂ふべきである、人身マグネットは此偉大無限なる自然力を最も適切に應用したる精神療法である、抑も血液は人體組織中最も必要なる要素で、常に之が補給を怠りてはならぬ、若し瞬時でも之を休止すれば、直に死に至る、實に血液の循環は人體組織に營養分を供給するは、言ふまでもなく、體内の勞瘁せる物質、有毒素等を各組織より受けとりて、肺、皮膚、腎臟等の

排泄器官に依りて、體外に驅逐する所の新陳代謝の作用をする、又血液は抗毒素を作り、或は白血球の喰菌作用に依りて、總ての病原菌を撲滅する機能を持つて居る、血液の斯く偉大なる作用は、其酸化作用の旺盛なる時に主として行はる、其完全なる酸化作用は、肺臓及び皮膚より充分に酸素を吸収するとき、直に血液の機能を遲鈍ならしむ、身體諸器官の抵抗力を減じて種々の病氣を誘發し、且つ傳染病をも感染し易からしむ、身體諸器官を病的ならしむる原因は、悉く血行の順と不順との作用によると謂ふてもよい、従つて其病疾の差異も常に器官組織の相違によりて、各特殊の名稱を附し、病名を分類するに過ぎない、之言ふまでもなく、病原は一つで均しく血行の不順障礙に歸着せないものはない、蓋し血液の循環がよく調和して、滯らなければ、疾病はない、斯く血液が一般健康に對し、最大なる關係を持つて居る、又最も有力なる治療機能を持つて居る、其血液をして完全なる働きを遂げさせるに唯一の力ある酸素が、如何に吾人の生體に偉大なる價値を以て居るかに、想

ひ至るでせう、人身マグネットはこれを病身に及ぼせば其靈妙なる作用によりて、體内固有の磁性を刺戟し、之を積極化して血液中に酸素の飽和を容易にし、一般の生理機能を盛にして、新陳代謝の作用を極めて順調ならしめ、其自然良能たる動物體天賦の本能によりて、凡ゆる疾病を自然に治療せしむることが出来るのである。

第三章 人身マグネット療法を行ふ法

人身マグネット療法を行ふには、先づ患者をば椅子に凭らすなり、平臥せしむるなりして、深呼吸をなさせ置き、術者傍に正座し、神を祈り、精神を統一し、術者の精神が神と合一したる状態となりしとき、術者は患部に手を當て、手の先きに微動を與へつゝ、患部は癒ると強く精神を凝すのである、然ると術者のマグネットは患者の患部に通じて、患部は癒され健全になるのである。

又一法あり、患者を坐せしめ、又は椅子に凭らせ置き、重病なれば臥さし置き、

患者に深呼吸を行はせ置き、術者は其患者に對坐して九字の臨印(人身自由術療法参照)を結び、深呼吸をなし精神を統一し、口中にて乾、発、離、震、巽、坎、艮、坤と唱へ、坤と云ふ時、一層全身に心力を凝めて其臨印を強く前方に突くと患者は術者のマグネット力に刺戟されてビクリとする、最もよく感應する患者起立し居ると其折後に倒るゝ、其機に乗じて痛みは取れた、壯健になつたと強く繰り返して暗示すると、其暗示の通りになるものである。

人身マグネットの效ある道理

人身マグネットの効果は、患者の體質により多少反應に緩急遲速の別はあつても、瞬間にして人體の組織細胞及び血液筋肉に一種の刺戟衝動を與へ、特に心臓及び動脈の如き循環系統及び肺臓皮膚の如き呼吸系統に現はるゝ、反應は循環系にありては血脈は充進し、脈搏は強實となり、脈數は整調し、靜脈は怒張する、呼吸系にありては漸次呼吸は整調して深大となり、又同時に皮膚呼吸は旺盛となる、各臓器の働きをよくして新陳代謝旺盛となる、體内の勞瘵物有毒物等を各排泄機能によりて體外に驅逐するから、血液は常に新鮮にして活力を増し、抵抗力又強盛となりて病原を撲滅し、遂に天賦の健

術者は神に成りて初めて效が現はるゝ

康を保存するに至るのである、斯くて人體の血液常に新鮮にして、活潑に循環已まざる間は、生氣常に潑測として病魔に侵さるゝ、事なく、偶々病原の侵入することがあつても、速に之を撲滅驅逐して健康を確保することが出来るのである。

此療法を行はんとする術者は、肉體は人でありても、精神は神とならなければ充分の效が擧らぬ、患者自身の誤れる固定觀念で、術者の救濟的福音の言葉が更に腦裏に響かず、効果が擧らぬ場合がある、神の御言葉は誠に有難い御言葉には絶対に服従するとの信念を患者に起さしめなければならぬ、夫れには術者は日頃、修養を勉め人格を高めなければならぬ、術者が治療をするのは治療料を欲しき爲めのみではない、治療をするのは天の使命を果すのである、人を救ひ世を救ひ度いからである、天皇陛下に對し、奉りて國民たるの義務を全ふしたいからである、との大信念を以て之に當らなければならぬ、此術者の淨い慈悲に満ちた精神は、天地の大道に通じて何事もならざる事はない、眞に此精神を持たば、其術者は必ずや神佛の如く信賴せられ

不幸増進する
も苦にならぬ
修養

其言葉は神の御言葉として信頼さる、術者の淨い氣高い精神は、患者の精神に感應し、患者の心身は淨められ其肉體は健全となるのである。

マアカスアウレリウス氏は、祈禱を信者に勧めて曰く「神よ我子を救ひたまへ」と祈る代りに「神よ予をして我子を失ふことを恐れしむる勿れ」と祈れと云ふた、私は此教訓に基き、患者に向つて祈禱をするときには痛みを取つて下されと祈る代りに、如何程痛みても氣にかゝらぬ人にして下さいと祈るとよい、又此不幸より脱せしむる様に「と祈る代りに此不幸に何百倍の不幸が重なりても、少しも氣にかゝらぬ人にして下さい」と祈るとよい、此種の祈り方を患者に教へてやり、患者をして病氣を苦にせない觀念を強めさせ、全治せしめた例が多い、病氣が苦にならなければ、既に癒つたのである、苦にせないやうに祈ることは、即ち全治を祈るのである、只其祈り方が表面よりすると、内面よりするとの差あるのみである。

信心と信仰との別

信仰療法と祈禱との關係

第十四卷 信仰療法

第一章 信仰療法とは何ぞや

信仰とは神佛を禮拜し、祈禱することではない、神佛に禮拜したり祈禱することをば信心と云ふ、信仰と信心とは全く別である、信仰は普通信心によりて得らるゝもので、確乎不拔の精神である、其精神の通りにするのが、正當と信じて、斯くせなければならぬ、と確く信じて動かぬのが信仰である、其信仰を得ん爲に、普通信心をする、又は宗教に歸依するのである、信仰療法は之によりて、確かに癒るとの確き信心を得て、其信心の通りに癒すのである。

信仰療法は、多くは祈禱による、祈禱を行ふに當りては、術者又は病人の祈禱は、直ちに神靈に通じて、疾病は除かると信じなければいかぬ、神より治病の能力を授與せられたる特殊の人の技能を信じなければいかぬ、牧師僧侶法主の如き宗教家の祈禱は、衆俗の到底企及すべからざる偉力があると信じ

なければ効果が擧がらぬ。又お水御符の如き、特殊の物件は神の恩恵に依り、靈妙なる治療作用がある、と信ずると其信じたる通りに病氣は癒る、某所にて某人が信仰療法を行ひ、其效驗著しと傳聞し、行いて其治療を受くると、病氣は速に治すと豫期し、其處に多くの患者が集合するときは、其れ丈けにても、病人は自己の病氣は治癒するとの相互の群衆暗示となりて早く癒る、尙ほ衆人の實際治癒したる話や、其御禮として獻納品が山なすを見ると、病人の感情に良好の影響を興へ、治療を速かならしむる、これを要するに、この療法の効果を左右する主體は信念である、自分の現在の疾病は、自分の罪業に對する神佛の所罰であると思ふ患者には、其所罰を許して貰ふ祈禱をすと、安心して直ちに癒るものである。

第二章 自力信仰療法の原理現象

近松作の箱根靈驗記は、覺の勝五郎が仇敵を討たんがために、初花と共に箱根權現へ祈願を籠め、其熱心は遂に覺を治癒した事を傳へてゐる。箱根權現

箱根靈驗記

壺坂靈驗記

を對象物とした信仰による豫期の暗示、即ち箱根權現は靈顯高き故、祈願すれば必ず癒ると確信す、然れば其確信通りに血液及び筋肉は働いて、治癒したのである、其れは自己暗示と神の加護によりたるものであると思ふ。彼の壺坂靈驗記は、盲人澤市が妻お里と共に壺坂寺觀音に平癒を祈願したが、效驗がなかつたため、悲觀の極、溪谷に投身したら、澤市の眼は開いた事を記してある、此事實を學理的に觀るときは、澤市が壺坂寺觀音に平癒を祈願したが、觀音の效驗がなかつたのは、未だ信仰心が薄かつた故である、併し悲觀の極死を決し、溪谷に身を投じて、岩石に一身を打撲せる、其一刹那に心機一轉して生理的に變化を起すと共に、神の加護によつて、開眼の結果を得たものと解釋する事が出来る。

神佛に向つて、自己又は他人の病氣の平癒を祈るは迷信である、神佛は醫者に非ずなど、冷笑するものがあるが、神佛に祈れば病氣の平癒することは事實にして迷信でない、又學理上立派に其道理を説明し得ると信じます、素人が病氣を癒す爲に、神佛に祈願を置める方法に種々ある、お百度詣お籠り、

お百度詣

お水御符等其他各宗各派によりて特殊なる幾多の方法が有る。百度詣とは、百本を一束とした紙捻を一本宛算へ、神社佛閣の門或は門内の百度石なる標石より、堂宇の間を百度往來して祈願するのである。時に本堂の廻廊等を百週することもある。一週間或は二十一日間、又は一箇月の間、毎日百度詣を爲すときは、往還の歩行運動はよく、其人の身體を生理的に健康ならしめ、歩行の度数を一々算するは精神をよく統一せしめ、平癒を得んとする觀念を強くし、一日百回の往還を爲しつゝ、祈願せりとの觀念は、日を加ふるに従つて益々強く其満願の日が近づくに及んで、之と共に必ず平癒すとの信念は、愈々的確に豫期せらる。従つて其豫期通りに肉體は變化するのである。即ち心に堅く觀念した通りに肉體は變化すると云ふ、原則通りになるのである。殊に偉大なる力を持つて居る神佛の靈顯が加はりて、不思議の效顯が現はるゝのである。

參籠

お籠りとは神佛に祈願の成就を希ふがために、一週間とか三週間とか日を限つて、終日終夜御堂に參籠して念佛讀經又は祈願をするのである。時に斷食しつゝ、行ふこともある。念佛讀經又は祈願は心理及び生理上より見るも、精神を統一し肉體を健全とする效がある。又絶對無限の力ある神佛の靈驗談によりて偉大の效を奏するのである。

寒中水行

風向ほ凍る極寒三十日間、不動明王に祈禱しつゝ、水を浴びて身體健康となりしは、近頃稱揚する冷水浴を行ひしものに、不動明王の靈顯が加はりしものである。又祈禱によりて靈驗含めりといふ米粒水又は菓子類をお水或は御符と稱して、治病の爲めに服して效があると傳へられる。何れの法も心理上より見れば自己暗示で至誠を以てするとき、其效驗や大である。然り而して唯注意すべきは、酸敗せる菓子や、腐敗せる水を飲みて尙ほ聖なりとするが如きは、大に慎まなければならぬ。非衛生的なる行爲は却つて其れが爲めに病を招き禍を大ならしむるに至ることがないとも云へぬ。

撫て佛

多くの堂宇に見らるゝお寶頭廬様と稱する撫佛は、祈願者が自己の患部に相當する撫佛の體部を撫で、其手を以て自が患部を撫で、以て平癒すと信

祈禱

ぜられて廣く行はれてゐる、之を心理上より見るときは、斯くすれば癒るとの強き信念が治癒せしむることは確實である、然れども醫學上より見るときは、最も恐るべき微生物の媒介となり却つて不測の災を招くことがある、注意しなければならぬ。

身心を健全にせんがために、朝夕神佛に祈禱を捧げるとは實によいことである、各自其信仰する所の神佛に向つて朝起床時と夜就床時とに神前に静座して、經文又は呪文を誦讀せば、精神は統一し、精神を清くなし、精神力を蓄積する効果がある。

若し時間に餘裕ある人は、成し得べくんば、朝夕一時間宛も讀經すると、慥に身心は清らかに、平和圓滿の人となる、之によりて吾人類の最も尊重すべき人格を發揮せしむることが出来る、是に依つて余は大に神信心の必要を叫ぶものである。

神信心の必要

第三章 他力信仰療法の原理現象

神の心は人類に幸福を興ふ

黒住教祖黒住宗忠師嘗て思へらく神の心は何事につけても、人類に幸福を興へやうとする、故に己れ神明たらんとするには、必ず世人の喜ぶ所を爲さなければならぬ、とて惡を避け善を修し、身心を清め、精神を籠めて太陽を拜し、天地生々の靈機を自得す、之即ち天照大神の恩徳によれるものである、と信じ、毎年伊勢神宮に參詣を怠らず、爲に宗忠師は自己の肺病を治し、健康となり、而して後神書を講じ、禁厭を行つた、宗忠師氣を吹きて人の病を治し、其信徒多く盛んであつた。

白紙も信心が

神を祈つて我病氣癒へます様、癒れば鳥居を獻納します、又は額面を奉納しますと願をかけ、祈念すれば、確かに病は癒る、精神治療の根柢は爰にある、神の靈驗著しいのによるは、勿論であるが、白紙も信心柄と云ふ言葉がある、白紙に向つてなりと、確かに信仰を以て念ずれば、必ず念じたる通りに病は癒る、其場合に自己の病が癒るは、自己心理療法である、他人の病を癒し得るは、神の靈驗と祈禱者の精神の感應である、故に神を信ぜなければ、効果が無い、信ずれば白紙でも、効果がある、試みに著名の神社佛閣を見、ると大願成就の御

禮として奉納物が夥しい之は醫院や病院も遠く及ばぬ效跡を其神佛が顯はした験である之を要するに神を祈りて病の癒るは自己暗示療法によると祈禱者の精神の感應と眞に神の癒し賜へる處と合して初めて偉大の効果が擧がるのである。

神力治病の事實

治病は神力による

或人は豫期心にのみよりて其現象を説明せんとするがそれは不當である、余の實驗に患者に少しも神に平癒を祈ることを知らせず、祈りて全治した事が数々ある、此場合には患者の豫期心は毫も無いのによく全治した之れ正に神力と術者の信念の感應とによることを證明して餘りがある。凡そ治療は何れの治療でも皆神の力によりて治るのである、神によつて自然に定められた療法を行ふに當つて、祈る神又は佛は何神何佛でもよい、祈る形式祝詞又は經文は何れでもよいが至誠を以てせなければならぬ、術者は神の如き清き心となつて、病めるものを救ふとの心の外、何等の邪念があつては不可ない、又患者は神が手づから其療法を施し、被下ものとおもつて、療法に逆らふが如き心を起してはならぬ、神は親切にして間違ひがない

から成り行きは如何ようにも御任せ申すとの心となりて、初めて偉大の靈験を下し賜はるのである。

第四章 信仰療法を行ふ法

人の精神は無線電信的の働きを以て居る、非常に強く人に怨まるゝ事あらんか、其怨みは通じて病人となる事がある、又は人を恨み、怒り、悲しみ、自分の精神を損じたるが病氣の原因となつて居る事がある、然らば自己の心靈の迷ひを解きて清らかとし、人なり神なりに懺悔し、感謝すると病氣は癒る、其原因が患者と術者によく分つて居ればよいが、若し分らざるときは、患者より病氣に付て詳細聞き取つた上、術者は神前に静座して目を閉ぢ、掌を胸の前に合せ、念佛を唱へ、經文を一心に唱へる、患者をば術者の傍に静座せしめ、全癒を祈らする、若し病氣重くして患者臥して居るときは、術者は其枕元にて祈願する如斯して、約三十分も経つと、術者の合掌した手先に微動が起り、次第にそれが激しくなつてくると、患者の合掌した手も無意識に動いて

人の怒りや恨みが病氣の原因となる

病原を神明に聞く法

生靈又は死靈の榮り
生靈死靈は迷信でない

くる、次第に激しく動き、終に動きが止まると、患者自身無意識にて病氣の原因を告げることがある。又術者の胸中に病氣の原因があり、と見えることもある。其現はれた病氣の原因は、或人が非常に怨みを抱いて死した、其死靈の祟りに依る事がある。又は現に生きて居る者の怨み重なりて起る生靈の祟りであることがある。其原因明らかとなれば、術者は其原因を除くことに勉むる。其原因の除去は神佛に向つて患者をして懺悔せしめ、神佛の靈顯によりて罪を亡ぼし、健康體になる様祈願し、且つ患者に病原除去の言語暗示をするのである。然ると不思議に重病も根治するのである。科學一點張りの人は、生靈死靈など、云ふことは迷信で、愚夫愚婦の信ずべきことである。知識階級の人は皆笑ふて顧みないと思ふものもある。其人は催眠術の實驗で術者の精神が遠く離れて居る、被術者の心身に影響し、術者の觀念したる通りに、被術者の手足を不隨にし、隨意にすることの自在なる實驗を知らざる人である。斯る科學一點張りの人に精神の研究を勧め、生靈死靈を實地に見出させたい。

第十五卷 クリスチャンサイエンス療法

第一章 クリスチャンサイエンス

療法とは何ぞや

クリスチャンサイエンスは直譯すれば基督教の科學で、今から五十二年前、即ち西暦千八百六十六年に亞米利加合衆國に起つた精神療法である。創始したのはマリ、エー、エム、ベーカ、グローヴァー、バタソン、エディと云ふ長い名前の夫人である。『科學と健康』といふ一書を著して始めて是を提唱した。此の書はクリスチャンサイエンスの一切を網羅した唯一最高の經典で、要するに基督教の教義から出發して、すべての病氣を絶滅する方法を説いた。其の療法は靡然として全米を風靡し、今より數年前に於て既にこの派の教會數七百に及び、學校を有し、新聞雜誌を發行し、社會的勢力は却々大きく、マアク、トウエインの如き大文豪が數百頁の書物を著し、この療法を批評し

クリスチャンサイエンスの開祖

天使の告げに
より發見した

賞揚してゐるのでも其の勢力の大なるを想像して見ることが出来る、エディ夫人は幼少の時から極めて俊敏な頭腦を有し、十歳の頃既に伯布來、希臘、拉丁等の古語に通じてゐたが、結婚後千八百六十六年に至つて、或る日天使が夫人の前に現れ、小さな書物を渡して、「これを読んだ後に食べてしまへ」と告げた。その中に書いてあつたのが、即ちクリスチャンサイエンスの事であつた。夫人はそれを悟つてその書物を食べると共に、忽ち人格を一變して、それまで修得してゐた所謂科學の知識を忘却してしまひ、たゞクリスチャンサイエンスばかりが頭腦に一杯になつてしまつた。是は夫人の自傳に於て語る所である。

第二章 クリスチャンサイエンス 療法の原理

四箇條の教義

クリスチャンサイエンス療法の原理を約言しますれば、根本の教義として四つの箇條がある。第一、神は一切なり。第二、神は善なり、善は心なり。第三、神心

根本思想

靈、これ總てにして、事物は無なり。第四、生命、神全能の善は、死、惡、罪、病を拒ぐ。然して此の根本教義を演繹して次の如き思想を主張するのである。曰く、人間は本來神の心を持つてゐる。神の心は善である。不死である。故に人間の心は決して滅ることなく、苦しむ事はない。世上の種々の事物は無であるから、決して本當に存在するのではない。眞實ではない。これらの事物に就いて心を費しては成らない。また神は一切であつて、常に善であるから、苦痛なるものは存在しない。苦痛と感ずるのは、實はさう感ずる如く想ふのであつて、本當の心は決して苦痛を感じない。従つて病氣などはもとより存在するものでない。たゞそれは病氣なりと思ふから生ずる一つの状態である。苦痛、死、病氣より遁れやうなど、は思ふな。遁れやうと思ふのはそれが存在する事を認めてゐるのである。其等のものは決して存在しない。たゞ事物によつて作られた幻に過ぎない。しかもその事物なるものは實は存在しないものである。と云ふ之れ其要點である。

病氣は出來無

第三章 クリスチヤンの療法的奇蹟

精神も肉體も共にエネルギー

ヘツケルが人間の肉體と精神とは唯一のエネルギーの異なつた二つの表現だと斷じたのは正しいか、その唯一のエネルギーなるものは萬有を作成する第一原理で、精神も肉體もこの第一原理より生じ、又その原理に歸するといふことは正しいか、この精神と肉體とは、その世界を全く異にして居り、相異なつた法則によつて支配されて居るかどうか、といふが如き哲學上の大問題をば全く捨て、基督は神であるか、人間であるかを見んに、彼はマリイといふ女から産まれた人間である、女といふ人間の腹から生れた男である、基督は吾々と同じ人間であつたが、其心、其行は神である、故に神として後世に名を残し、今尚吾人を感化しつゝある。

基督は肉體の病氣を治療した、其れを治療するには患者の精神の力を透して肉體の疾患を治療したのである、基督は人格の力、精神の感化を實現した、自己の想像力によつて、自己自らの病氣を治癒し得る力を有すること、自ら

基督の確心

基督の奇蹟は事實である

快復する若しくは快復したと信ずる、其の偉大なる信念によつて、重病も癒るとの範を示した、お前が救はれた、斯ういつて人をして、それが疑ふべからざる事實として、その人の上に信ぜしめることが、その人の病氣を救ふ最も善良な方法であること、を基督は能く知つて之を實行した、基督は暗示の方法を極度に力強く用ひた精神療法家である。

基督は自らを、神の子と信じ、神の道を傳導することが自分の使命である、と信仰したること、彼ほど深刻な、森嚴な、偉大な、強烈な信念に生きたものは、今日に至るまで二人とない、同時に其の性格は小兒の如く無邪氣で、無私で、従順で、溫和の極を現して居た、故に何人をも靈化する力を以て居た、加ふるに神の子として彼の信仰に對する徹底した眞面目は、其の一舉一動の上に記することの出来ない權威を表現した。

耶穌教の聖書新約書中の馬太傳及馬可傳には、治病の奇蹟が多く掲げられてゐる、此の奇蹟につき一部學者は科學的にのみ解釋し、之を無根として排斥す、併し多くの學者は聖典を信じて疑はない、精神療法を研究し患者の

精神上及び肉體上に療法的暗示を感じしめ得る事實を経験せる人は、聖典其儘を信じて、甚だしき不合理を感じない。基督は偉大なる神である。吾人の想像の及ばざる靈力を發揮せられて、不思議の奇蹟を擧げられた事と思ふ。基督が行ひし治病的奇蹟の主なるものを、馬太傳と馬可傳中より其一二の要點を述べて示しませう。

癩病が癒つた

第一例 イエス山を下りしとき 癩病の者來り拜して曰く、主若し旨に適ふときは我を潔くなし得べしと、イエス手を伸べ彼に按て我旨に適へり、潔くなれと曰ひければ、癩病直ちに潔れり。(八章一—四)

中風の治療

第二例 イエスカペナウンに入りし時、百人の長たる者來り願ひて曰く、主よ我が下僕癩風を病み家に臥して甚だ惱めり。イエス曰く我れ往きて之を醫すべし、百人の長たる人答へけるは、主よ我汝を我が屋根の下に入れ奉るは恐れ多し、唯一言を出し給はらば、我下僕は癒ん、イエスイスラエルの中にだに未だ斯る篤信に遇ざる也、イエス百人の長に往、なんぢが信仰の如く爾に成べしと、曰たまへる、其時に僕は癒たり。(八章五—一三)

第三例 癩風にて床に臥したる者を人々昇ぎ來れり、イエス彼等が信ずるを見て、癩風の者に曰へるに、子よ心安かれ、爾の罪は赦されたり、起ちて床をとり家に歸れと曰ひければ、起きて其家に歸りぬ。(九章二、四)

第四例 十二年間血漏を患へる婦人、うしろに來て其の衣の裾に捫れり、蓋し衣にだも捫れば癒えんと思へばなり、イエスふりかへり婦人を見て曰ひけるは、女よ心安かれ、爾の信仰爾を癒せり、即ち婦此の時より癒ゆ。(九章二〇、二一)

聾者開眼す

第五例 イエス此を去るとき、二人の聾者したがひて呼曰ひけるは、ダビテの裔よ我濟を憐み給へ、イエス家に入りしに、聾者きたりければ、彼等に曰ひたまひけるは、我此事を行ひ得ると信ずるや、答へけるは、主よ然り、イエスは彼等の目に手を按て、爾曹の信ずる如く、爾曹に成るべしと云ひければ、其目開けたり。(九章二七、二八、二九、三〇)

啞がもの云ふ

第六例 人々鬼に憑れたる暗啞をイエスに携れ來りしに、鬼追出されて暗啞ものいへり。(九章三二)

鬼憑病を癒す

第七例 イエスペテロの家に入り、其岳母の熱を煩ひ臥し居たるを見て、その手に捫りければ即ち熱さりたり。(八章十四)

第八例 日暮たるとき、人々鬼に憑れたる者を多く携れ來りたれば、イエス言にて鬼を追出し病ある者を悉く癒やせり。(八章十六)

第九例 會堂の宰ヤイロといふ人來り、イエスを見て其の足元に伏し切りに求めいひけるは、我いとけなき娘死に瀕せり、之を救はん爲めに來りて、手を彼に按きたまへ、然らば女は生くべし(中略)イエス此事を言ひ居るうちに、會堂の宰の家より來りて曰ひけるは、爾の女すでに死したり、何ぞ師を煩はすや、イエス直ちに其の告ぐる所の言を聞き、會堂の宰に曰へるには、怖るゝ勿れた、信ぜよ、既に會堂の宰の家に來りて、人々の忙亂いたく哭泣を見る、彼等に曰ひけるは何ぞ忙亂かつ泣くや、女は死ぬるに非ずただ寢たる耳、彼等イエスを哂笑ふ、イエス凡ての人々を出し、女の父母とその從へる者等を牽つれ、女の臥したる所に入り、その手をとりにて之に曰ひけるは、タリタクミ之を釋けば、女よ我汝に命ず、起きよといふ義なり、直ちに

死者同生した

に女おきて行めり、彼女は年十二歳なり云々。(馬可傳第五章二二、三、四、三八、三九、四〇、四一)

豫期的暗示

第十例 イエス宰の家に入りしに、笛ふく者および多くの人の泣咷ぐをみて之に曰ひけるは、退け女は死るに非ず、唯寢たるのみ、人々イエスを哂笑ふ、彼等を出し、後いりて手を執りしに女起たり。(馬太傳九章二十三、四、五)前述の奇蹟中第二例に於て治療を乞ひし人が、基督を我屋根に入れ奉るは、恐れ多しといふた、斯く術者を尊敬すればこそ偉大の效を擧げ得たのである、基督が病者を治療するに、患者の信仰が不明なときは、先づ必ず患者の信仰を問ひ、或は信仰すべきを命ずる、加之意志弱き弟子のためには、祈禱と斷食とを命じ、精神を統一せしめ、確き豫期信念を起さしめ、其後に於て初めて治療の暗示を與へた、其用意の周到にして方法の宜しきを得た事は、今日の精神療法家が秘訣とする所と暗に吻合してゐる。
基督が重病を即治せしめたのは、患者の信念力と基督の心靈力との合致に依つて顯はれたものと思ふ、基督の奇蹟中眞に全く死せる女を蘇生せしめ

た、とすれば奇蹟とのみ解釋する外道がない併し其死を假死の状態にありし患者と解すれば假令死者を回生せしめたりとて毫も不道理でない凡そ人の精神は互に相感應し交通する事は種々の的確なる例證によつて明かである、基督は神である、吾人の想像し能はざる靈力を備へらる、其靈力を發揮して假死者を蘇生らしめたものと解することを得、恐るゝ勿れたゞ信ぜよと一切の疑念を打消した、死せるにあらず寢たる耳と曰ひて斯く信じ斯くしたのである、イエスの偉大なる靈力は患者に感應して其肉體を左右し、啞者に言はしめ、聾者に聞かす、癩癩を治し熱病を癒した、失神者に對しては其血液の循環を恢復せしめ、諸臓器を活動せしめ、起死回生の奇蹟を擧げたのである、吾々の如き罪深き者靈力の鈍き者信用の乏しき者でも、重病者を即座に健全體となしたことが往々にある、即ち基督の行つた奇蹟によく似た現象を起し得たことがある。

死者を蘇生せしめし道理

基督が用ひたと同じ方法が今日非常な勢ひを以て、精神療法家が行ふて居る、ハンモンド博士の調査によれば、病人の七割五分までは自分の想像で自

想像療法

分の病氣を惹起して居るといふ、驚くべき事實を示して居る、これと同時にハンター博士は自分の想像で病氣となつたものは、又想像の力によつて全治する事が出来ると稱して居る、殊に總ての病氣の初期にあつては、想像が多手傳つて居る、故に想像作用によつて全治することが最も早いと力説して居る、想像即ち自己の意志によつて自己の疾病を醫するといふことを基督は最も巧に之を用ひて效を擧げた、又今日の進歩せる醫術の中でも、之は最も進歩した方法である、この想像治療は現代にあつては精神療法と稱して居るが、古代に於ては之を奇蹟と稱したのである。

第四章 クリスチャンサイエンス

療法を行ふ法

此療法として米國にて行ふ法は、クリスチャンサイエンスの教義と、基督の奇蹟とをよく理解して、その信仰を確實にすることである、それで此の派では時々新聞雑誌の附録として印刷したものを一般に頒布して療法を行ふ、

信仰の確實と治病

その一例を示すと赤色の紙に次の如く印刷してある、曰く「是を手を持ちて下の言葉を静かに幾度となく唱ふるものは、病その身より去る、三月二十日より三月二十日まで毎日午後九時力の確信、神聖なる心霊の力は、今やわが身の内に湧き出でた、もはや去ることはない、(毎日正午)繁榮の確信、尊き神の財寶は今やわが身に授けられた、われはすべての善き物に充された、」それでこの療法を受けようと思ふものは、その印刷物を手に持つて示された通りに行へばよいのである、かう云ふ簡短の方法で米國では大效を擧げて居る、實際これに病氣が癒り幸福になつたものが極めて多い、多いければこそ此の教派の勢力隆々たる所以である、就中十歳位の少年で、高い崖から墜落した場合に、神色自若とし泣きも驚きもしなかつた、と云ふ如き有名な實例もある、これ此法が病氣を治する事の外に、精神修養として重要な價値を認められてゐる所以である、さりながら我が日本國に於て行ふ療法としては、之だけでは患者が物足らぬ感を感じ、爲に効果が充分に擧がらない、故に講述者の行ふた、クリスチャンサイエンス療法の法をば次に申しませう。

先づ患者をば大廣間に集め、クリスチャンサイエンスの教義に基き説教をする、尙次ぎの意味の説教をする、神力の偉大であること、神は常に吾人の心身を左右して居ること、神は絶對萬能の力を以て居る事、神の靈顯によれば重病も容易に癒に癒る事、既に療し得た實例が澤山にある事、此室に集まれる病者は必ず救はるゝ事などを説教し、病人をして自分には確に救はるゝとの信仰を起させ、來會せる病人一同に神を祈らしめ、我身の罪を懺悔せしめ、全快を祈らせ、讚美歌を唱はせ、樂器を鳴らす、斯くして精神を轉換せしめ、信仰心を起させ置きて、病人一同を閉目せしめ、神に全快を祈らせ置き、術者は精神を統一して基督に近づき、基督を心に見つゝある状態となり居りて、心力を凝めて指頭を病人の額上又は患部に當てゝ、君の病氣は天にまします我父イエスキリスト様が癒して下さる、最う癒つた、アーメン、アーメンと祈る、然ると直に苦痛は全快する、或は輕快する、斯くて多くの患者を順々に癒して行くのである、一と通り治療終らば、又讚美歌を唱へ祈禱をなし、且米國に於ける此療法の方法と同じく、患者歸宅の後に、神は必ず我を救ふて健全と

なし給ふと朝夕は勿論暇ある度に祈る事と深呼吸を行ふ事を必ず實行する様に諭して歸すのである。此療法で不治と思ひし病人が癒つた實例が澤山にあります。稀に癒らなかつた人がある。調べて見ると其人は術者の命じた事を少しも實行せなんだ人である。

總て精神療法を行はんと欲する人は、素行純潔で品性が高く、博愛慈善に富む人でなければならぬ。獨り療法に就いてのみならず、何事にも、他人の爲め、世間の爲めに最善の努力を惜まぬ人でなければならぬ。苟も患者の信頼に背く様のがあつてはならぬ。國民道徳は勿論一般の道徳を重んじ人道主義の爲に盡す人でなければならぬ。治療は自己の天職であると信じ非常の趣味を以て、獻身的に従事しなければならぬ。若し然らずして營利の觀念のみで治療を行はば、其治療は社會の爲に害をなすも益なく、其術者も亦失敗に終り信用を失し、應ては自己の立場を失ふに至るべし。嗚呼慎むべきは不善で成すべきは最善の努力である。

第十六卷 大靈道靈子術療法

第一章 大靈道靈子術療法とは何ぞや

大靈道とは何か、主唱者田中守平氏曰く大靈道は宗教に非ず、道徳に非ず、哲學に非ず、科學に非ず、是等過去時代に在りて人類世界に發現せる有ゆる思想學術を包括超越す、而して宗教に對しては其源泉たり、道徳に對しては其根本たり、哲學に對しては其基礎たり、科學に對しては其歸着である。大靈道は宇宙根本の大實體を總體的に觀察したるもので、實に超劫超邊超在超非在である。宇宙は即ち大靈の顯現にして、太とは大小差別の比較を絶し、靈とは物心萬有の根源を意味す。道は萬有及び萬有の根本總てに通じ行はるゝ處の道則を意味す。即ち大靈道とは絶對超越にして萬有の根本たる處の靈の道則と云ふ義に歸着すると、此説の當否は別として之は確に主唱者の創案にして其着眼點は妙である。主唱者は一大確信を以て人の曾て唱へしこ

となき此説を天下に叫ぶや、終に智識階級の人々をも動かし、又外字新聞は之を論述して海外に傳へたと聞く、實に驚かざるを得ない、去り乍ら有名な哲學者及び宗教家が更に之を顧みざるは何故であるか、大靈道の中に靈理學と靈子術とあり、靈理學は靈理を究める學科であると云ふが、眞に一の學科として見る丈に秩序立ちたるものなるか、靈子術は大靈道の應用なりと云ふ、成る程大靈道、靈理學、靈子術と云ふ語は、主唱者が發案せる熟字にして耳新しい、然し靈子術と云ふて行ふ所の實質は、在來より行はれたる精神現象にして、諸學者が既に論述して其原理現象が明かである處の祈禱上の觀念運動、プランセットの活動、機轉術の働きと一致してゐると思ふ、然るに靈子作用の現象は新發見にして物質作用でもなく、精神作用にも非ざる現象なりと云ふも、此點は御尤もと敬服することは出來兼ね、之に就ては後に詳述します。

靈子術とは何ぞや

大靈道の思想は人間精神の安立を圖るにあり、其れて人間の肉體の健康を圖る方法が靈子術であると唱へり、靈子と云ふ言葉は物質を無數に細分し

顯動作用潛動作

た單位を原子と稱する如く、大靈と形成する極々微少の單位を意味するのであるが、靈と云つても物質に對稱した言葉ではなく、物質と精神の二元をなすその根本のものであると云へり、而してこの靈子は人間の身體中に種種の發動をするものであつて、その作用を二つに別つて靈子顯動作用と靈子潛動作用とする、靈子顯動作用は靈子の運動が肉體上に顯れて、肉體を盛んに運動させるのである、この運動が健康を増進させ、疾病を治癒せしむる效がある、と唱へてゐる、即ち是は自己療法に應用せられる所のものである、潛動作用の方は靈子の運動がその起つた方の肉體に顯れないで、他の物體(人體でも器物でも)に傳つて是に顯動作用を起さしめるので、此の方は他人を治療するに應用せられるのだと云ふてゐる。

第二章 顯動作用を起さす法

靈子術を分ちて顯動作用、潛動作用の二とす、先づ顯動作用を行ふ方から云へば、之を行ふ時の姿勢は座して行ふ座式、立ちて行ふ立式、臥して行ふ臥式、

行者の手振と
顯動作用

任意に行ふ自由式なぞある、その各式にもまた夫々兩手を合掌し兩臂を前
 伸したり又は曲臂したり、垂臂したりなどする型式がある、歸する所合掌し
 て手は動く、観念すると動くことである、彼の行者が神に向つて合掌し神
 を祈り居ると合掌が上下左右に振るゝと同じであると思ふ、之を顯動作用
 と云ふ、自己催眠術上の観念運動の一種と見ることを得、主唱者曰く、受術者
 の心は雑念に満ちてもよい、精神統一は要らないと云へり、之は多くの人は
 之を行ふときに雑念が起き、精神は統一せざるを常とする、精神統一せざれば、
 治療の効なきと観念す、効なきと観念すれば無効に終るを常とする、故に
 精神統一を要せずと云へば、精神統一せざるも之にて癒ると観念する、故に
 るのである、精神統一を要せずと云ふは一の方便に過ぎない、最初之を修得
 するには午前一時頃の世の中の最も静かな時を擇び、座式ならば膝頭を成
 る可く廣く後を成る可く淺く組み、姿勢を正しくして肩を少しく後へ反ら
 し、眼を閉ち口を塞ぎ、合掌ならば兩手を胸部に合せ、そして雑念を拂ひ、無
 念無想になりて、或は全真太靈なる言葉を默唱し續けてゐると、やがて合掌

精神統一を要
せずと云ふ道

身體躍動する

吹息顯動法の
原理

してゐる兩手が微動し始める、是れ即ち顯動作用が起り掛つたのである、微
 動は次第に激しくなつて、終には手のみならず、身體が坐つた儘で、或は前に
 或は横に或は上に躍動することがある、是は各人の素質と修得の巧拙によ
 つて、僅かに一回の試みてこの作用を現す事がある、數多の努力によつて始
 めて體得する事もある、併しながら練習すれば時と所とを問はず顯動作を起
 し得、また身體中何處でも即ち手ならば手、脚ならば脚を自由に自分の思ふ
 通りに顯動作を起す事が出来る、と云へり、講述者は催眠術療法を行ふ前、神前
 に座して神に祈禱を捧ぐる、其折患者をも神前に座せしめて、平癒を祈らす
 るが、患者の多くは合掌せし手が、上下左右に振り動き、留らずに居ると身體が
 坐せし儘飛び上るものがある、大靈道の唱へる顯動作用は、只神を祈り居る
 丈けて自然に行はるゝことがある、以て其顯動作用の何者なるかをトすべ
 きである。

又吹息顯動法と云ふて、被術者の後に術者居りて被術者を吹き、又は突くと
 被術者の身體前に倒るゝ現象がある、之を見て不思議の術であると感ずる

人がある、之れは催眠術上の暗示作用で容易に行はるゝことで、催眠法の形式を行はずとも感性的の高級人に對しては吹かすとも心で念じた丈で前に倒すことも飛ばせることも出来る、吹くとか手真似をするとか、又は手を以て突けば最も容易に行はる、故に此現象は暗示作用である、従つて新發明として感心することは出来無い、催眠現象として從來より行はれしことと一致して居る。

第三章 潛動作作用を起さす法

潛動作作用とは何であるか、自分の肉體を動かさないうて居つて、靈子の運動のみを他に傳へる法である、此作用を修得するには先づ押掌潛動法と云ふのから始める、其れには靈子板なるものが必要で、是は杉檜などの軽い材を以て縦七寸横四寸、厚さ四五分位の長方形に造る、始めは一枚だけ机の上に置き、板の上に薄紙一枚位を隔てた心持で掌を軽く載て居るのである、さうすると掌から發射する靈子は其板に傳はつて、板を前進せしめる、一枚の

靈子板

靈子板で成功すれば更に其上に一枚を重ねて試み、二枚が一つになつて前進すれば好いので、次第に板を増て百枚を重ねて而して動かし得る、即ち潛動作作用を傳へ得るに至れば、病氣治療を行ふに差支へのない能力を得た驗してあると云ふ、押掌法の他に爪端潛動法と云ふて、自分の爪の端を微動させる法がある、皮膚潛動法と云ふて皮膚の或部を潛動させる法がある、又圓形の物體を廻轉せしめる廻轉潛動法がある、椅子卓子等をも動かし得る潛動法もあるといふ。

ブランセット術と机轉術

彼のブランセットに手を載せて居ると、彼は活動して畫を書き字を書き、又は活躍して踊を踊ることがある、又机轉術と云ふて圓テーブルに手を載て居ると、テーブルが廻轉し、時には空間高く飛び上ることがある、机轉術をやり居る人が空中に飛び上ることもある、之等の現象即ちブランセット機轉術のことは、精神學上立派に説明せられて人の能く知る所である、(ブランセット機轉術及び机轉術のことは拙著男女運命豫知術に詳述しあり)靈子術の潛動作作用は彼と同一現象であると信ずる、又催眠術で被術者の不隨意筋を左

催眠現象と靈子術の現象

右すること、即ち耳を動かすこと、脈搏を高低遅速することは普通に行はる、靈子術に云ふ爪端潜動法皮膚潜動法の現象と同一であると思ふ。又催眠術には觀念運動と云ふ現象がある、催眠者の手は心に思ふた丈で思ふた通りに左右上下又は回轉して止まざる現象がある、其現象は靈子術にて手上下に動く現象と同一であると思ふ。

第四章 田中守平式靈子術療法

田中氏が靈子療法を行ふ顛末

田中守平氏が靈子術で病氣を癒す方法は第六章に詳なるを以て爰には其の概要を一言しませう、氏は患者の身體を撫たり揉む様のことをする、手を軽く患部に觸れて撫下し催眠術を行ふ様のことをする、又身體の各所を揉んだり押へたりして按摩を行ふ様のことをする、又念力を凝して氣合をかくる様のことをする、手を觸れたり思念を凝したりするのは、術者の靈子を患部に傳へて病氣を癒すのであると云ふ、又手掌潜法と云ふて、靈子板に手掌を載せて置き其板を動かす法がある、其板に手を觸ると同様に患部に

靈子術で病氣の癒る原理

手を觸れて微動を興へることもする、又場合によりては患者と遠く離れて居りて、念力を凝して行ふこともある、靈子術で病氣の癒る根本原理は、術者若しくは被術者の精神作用で癒るのでなく、術者の靈子を患者の靈子に感應せしめて、病氣を癒すのであると唱へて居る、成程斯の如き方法を行へば、病氣が癒ることあるは事實である、然しそれは暗示術療法の一環と見ることも出来る、在來より行はれ居りたることに新しき名稱を附し新らしき理論を附せし者乎、田中氏の術が偶然に舊來の術に暗合したのか。

第五章 古屋鐵石式靈子術療法

講述者の考へによれば、大靈道又は靈子術と云ふ七六箇敷い理論は此治療を行ふ上に必要を認めない、併し顯動作潜動作靈子療法と稱する現象は事實にして、余は催眠術の現象として日々行ひつゝある、之は催眠術と云はずして、靈子術と云ふ方が耳新しくして、世人の好奇心を引くにはよい故に私は靈子術を行ひ呉れと云ふて來る患者には私の行ふ靈子術は催眠術

靈子術と催眠術との關係

應用ですよと斷り置きて、催眠術を應用し暗示を行ふて、顯動作作用、潛動作作用を活潑に起させ、且手を不隨にしたり、水を麥酒に飲ませたり、死した兩親に面會させたり、東京に居て大阪を見物させたりする、尙種々の暗示に感應させ、而して治療の暗示をなし大に効果を擧げて居る。

催眠術を行ふのであると云ふと病人を催眠状態にしなければならぬ、病人が自分で己は催眠したと思ふ程度までに催眠状態にすることは術者は骨が折れる、然るに靈子術であると稱して催眠術を行ひ、催眠しなくて病人は少しも身體に何等の感應がなくても、之は靈子術であるから、是で良いのだと云ふことが出来て、術者としては甚だ都合がよい、病人も又術者の其説明を信ずれば、信じたる通りに効力があつて重病も癒る。

曾て中央新聞社に於て、大靈道靈子術療法とは如何なる者であるか、を世に紹介せんとして、中央新聞の女記者及び男記者が、患者に化て大靈道本院に田中氏を訪ひ、靈子術療法を受け、其顛末を中央新聞紙上に連載し批評を加へたことがある、左に其大意を抄出して參考に供しませう。

第六章 新聞記者の實驗せる靈子術療法

中央新聞の女記者が大靈道本院を尋ね、施術料を拂ふて治療室に入り見ると、中央正面に厨子の様なものが、勿體らしく置かれ、其前には椅子が一脚、右側の方には寢臺がある。「貴女は何處が悪いのですか」と重々しい口調で訊ねたのは、辯護士の法服のやうなものを着た人である、頭が悪いと思ひます、什麼も夢を見たり、少しばかり考へると頭痛がしたりして困ります、それに物事を忘れ勝て、と云ふと其人は、「ウム、神經衰弱らしい」と斷言を聞かせるやうに、又獨言のやうな事を云つて、椅子に掛け居る私の頭に手を掛けました、術者は先づ私に目を閉よと命じた、其通りすると私の頭にかゝつた術者の兩手は、先づ私の頭を前後に動かしました、次で左右へ……頭に當つて居た術者の手は、今度は首筋にかゝりました、夫れが二三度經驗した事のある按摩さんの首筋を揉むのと大差ないのでした、術者の手は脊筋に當つた、左様かと思ふと、眼瞼の前を術者の掌が上下に往復して居るやう

反熱療法と云ふて熱布と冷水を用ひた

にも覺える時々ハツハツと息を出すやうな聲がする間もなく「宜しう御座います」術者の聲呆氣なく思ひながら眼を開く。此日は之で歸りました。翌日第二回目の施術には「此上に仰向きにお寝なさい」と云はれて、寢臺の上に横になつた術者の手が腹部に當つた……醫師が腹部を抑へて腹杯の疾患を診るのと殆ど同じでした……夫が濟むと湯を持つて來て、其中に布を浸し、其布で五分間程私の頭を温める。次に冷水の中に私の足を浸ける事約一分間、浸けた足を乾いた手拭で能く摩擦し「外氣に觸れると不可ない」と云ふて、スグに足袋を穿かせました。之を一日に二回やつたら頭の悪い者には極く良い」と勿體らしく教へて呉れる。之で此日の治療はお仕舞ひなのです。又其翌日第三回目の施術を受けしも、前と術法は異ならずし、此日施術後術者は「女記者」に「靈子顯動作用教授會」に出席してはと勧誘する……顯動作をやる時、非常に好い顯動作をすれば自分の肉體の病氣などは自ら癒す事も出来るし、又顯動作は唯病氣を癒すのみでなく、總てに應用して、非常に效があります……と其翌日勸められたので顯動作會に出て見た。先づ羽織を

顯動作用教授の模様

眞點とは何ぞ

脱いでしまへと教へらる、儘に羽織を脱ぎ不動の姿勢を取る、それから兩手を前に上げ、掌の中心、中指の附根から五分ばかり下つた所、それを眞點と云つて居る、其處に力を單めて合掌する、それから顯動作が始まる、顯動作は手を振るのだと擴げた兩手を振る、それは濡手の水を振つて、落すあの形です、兩手を振つてから、例の眞點に力を單めて手を合せ、所謂拜みの形になつて、胸の邊で合掌するので、之が顯動作の初まりです、そら手が顫へるだらう、今にモット顫へると云ひました、初めは力を單めて、掌を合せたのですから、之は誰でも顫へます、併し私は他の人のやうに顫へが激しくありません。初めは意識を加へても宜しい、意識を加へて手を顫はして居る中に、次第に意識を加へなくても顫へるやうになります」と云はれた儘に意識を加へて手を顫はしました、之なら自分の意識が命ずるので、手でも足でも自由に顫はす事が出来ます、併し意識を加へないと、手の顫は止まりません、次に身體が前に飛ぶ法を行つた先づ、私が踵と踵とを密着して立て居ると、私の腰を後から押した、押されたから體は前に少々自然飛出

す様になりす之は當然の事です。
次に中央新聞男記者大靈道本院を訪ふて施術を乞ふた、施術料は終身が三十圓、一週間が五圓、五圓を納めて施術を受くべく、施術室に入る、容態を告げると椅子にかけ目を閉ちよと云ふ、眼を閉ちたのでは何をするか判らないので、薄眼をしてゐる、術者最初手を組み合せ、膝下に當て、ウム〜と唸つた後、右手を數回打振つて記者の頭に當たり、頭髮を撫てたり、動脈を押へたりする、其順序とやり方は、マツサージ療法と大なる違ひがない、次に寢臺に横臥させて腹部を押へたり、手を押へたりする、最後に術者は腹部に力を入れて、ウムと唸り、へい宜しう御座います、これでお仕舞ひ。
其翌日又大靈道を訪ふ、術者は受術の爲に集まつた者に病は氣から出来ることを説明し、團體施術を行ふと更に深呼吸の方法を教へ、一同を正しく坐らせて眼を閉ちさせて、心の中で真大靈を唱へて居つて下さいと云ふた、記者は目を閉ちた様に裝ふて居ると、術者は三尺位離れて直立し息を深く吸ひ入れて、腹部の邊で手を握り合せ、ウム〜と唸つた後、握り合せた手を解

いて、右の手だけを打振り、其手を患者の頭の邊まで持つて行き、恰も催眠術者が眼を誘ふ時の様に、其手を額の處で上下さする、恁麼事を一人につき二回づつ、やつて、サア皆さん眼を開いても宜しう御座います、之れで團體施術なるものはお仕舞ひ。
中央新聞記者は自ら治療と教授とを受けし上、其顛末を新聞紙上に連載し、最後に左の如き意味の斷案を下した。
顯動潜動とかいふことは、悉く催眠術の所謂暗示作用に依つて起る、一種の精神状態を指したもので、催眠術の心得があるものならば、誰にでも出来る方法で、敢て不思議でも何でも無い、靈子術が疑ひもなく催眠術の一種である事は、大靈道の門を潜つたもの、誰でも知つて居る所である。
飽迄催眠作用ではなく、獨特の神祕不可思議な靈術と正體を不鮮明にして置く爲めに、大靈道とか靈子術とか名前を附けたに過ぎない、其證據には彼れ位の事は、東京市内に散在する催眠術家や精神療法家が容易く行つてゐる所、顯動や潜動等の作用は、靜坐法や呼吸法を知つてゐるものならば誰

祈禱と手の震

にても出来る業である。又特に呼物の奇蹟としてゐる。指一本の指圖で人間が飛んだり跳ねたりする作用は、催眠術療法家が何れも立派に行つてゐる。所で、催眠作用に伴つて起る精神力の感應で、今日では決して不思議でも何でもない。催眠術に志した者の自在に行ひ得る現象である。

潜動或は顯動の作用は、精神統一に伴ふて起る一種の心理状態で、何も不思議な事はない。現に禁厭や加持祈禱で術者とか巫女の類が古くから盛に行つて居る所で、凝念の結果身體に痙攣の如き一種の震動を覺えて來ること

は、多くの人が知つて居る。此理窟は心理學上にて立派に説かれてある。大靈道の靈子術ならば、患者を眠らせる必要がないのだから、催眠術の型丈で間に合ひ、其れで得意になつてゐるのである。

不審なのは新聞廣告に於て、盛んに指一本で人間が動き器物が飛ぶ云々と云ひ立てゝゐる。未だ曾て器物を飛ばしたり動かしたりした例がなく、僅に靈子板と稱する板を重ねて置いて、掌で押して見せ、誰にでも容易に出來る業を事更に、勿體らしく靈子の作用と稱してゐるのに過ぎない。

第十七卷 哲理療法

第一章 哲理療法とは何ぞや

哲理療法は立
場を哲學上認
識論によるも
の一元二面
論によるもの
と種々ある

哲理療法に種々あるも、講述者の行ふ哲理療法は、哲學の一元二面論によりて行ふものである。術者の精神力即ち病氣は癒るとの強烈の精神力が、病人の精神に感應し、其肉體をも變化せしめると云ふ理法に依つて成る(詳細は高等催眠學第二卷に於て菊判百頁以上に涉りて之を説明せり参照を乞ふ)

鈴木美山氏の唱ふる哲理療法は、病氣治療の根柢を哲學上一元の唯心論中認識論の立場に置いてゐる。其唱ふる所に依れば、宇宙萬物すべて吾人の心を離れては存在しない。吾人が此處に斯るものありと認識すればこそ、その物は其處に存在するので、若し認識しなければその物は決して存在しない。病氣もその通りで、斯くすれば病氣になるとか、斯くしたから病氣になつたとか思ふから、病氣はあるので、若し自分は決して病氣にはならない、病氣な

病氣は此世に
無い

るものは存在すべき筈がないと固く信ずるときは、吾人は病氣に罹ることがなく、又罹つた病氣も癒つてしまふ、何故なれば、病氣を認識しなければ病氣は存在しないからである。

此理に依つて起れる鈴木氏の哲理療法は實に其根據を誤つて居る、心で只無いと思つたのみでは實際存在するものは無くなるものではない、有を無と信ずるは幻想である、病氣が真に無いならば治療の必要はない筈である、病氣が有ればこそ、哲理療法を行ふ必要がある、鈴木氏の行ふ哲理療法の方は、術者は患者に向つて病氣はないと反覆心の中に疊み込んで、固き信念とすれば、術者の精神患者に通じ病氣はなくなる、其治療法としては要するに、余は神の子なり、神は全く余を愛す余は健全なり、病氣はないと強く心に疊み込めば、其れで病氣は無くなる、此術者たる其修養法としては普通正座して雑念を去り、黙想する、斯くして全く賢き信念が修養せられたら、自己の病氣を癒し得るのみならず、他人の病氣に向つて治療の力を發揮することを得ると云ふて居る、此療法に就ての長所と短所とを次第に申上ませう。

自己哲理療法

第二章 鈴木美山式哲理療法

鈴木美山氏著「哲理療法講義録」中に氏が常に行ひ、又は氏が門人に教授する哲理療法の方法が掲げてある、即ち左の如くである。

手を觸れる法とがあら

直接に患者の治療を爲すには患者に手を按て、行ふが普通の方法である、胸の病の時に胸の上に手を置き、腹の病の時は腹の上に手を按して行ふのである、此治療法に於ては必ずしも肉體に直接觸るゝ必要はないのである、衣服の上よりすれば夫れで宜しい、直接肉體に觸れては悪いと云ふのではない、只其の必要がないと云ふ迄であるから、都合上又時と處により其必要があれば、之れに觸るゝも差支はない、而して通常は直接患部の上に手を置くのであるが、之も必ず斯くせねばならぬと云ふのではない、病氣に、由つては之れを爲すに甚だ都合の悪い事が幾回もある、斯る場合は軽く衣服の上より觸るゝもよし、又之れを爲す代りに頭上に手を按じて、之れに代ゆるも差支ないのである、何故なれば哲理療法は、心を使用して病を癒す方法で

頭上に按手

指頭の摩擦

あるからして、病者の身體に接觸すると云ふ事は必要の條件でないからである。

又患部を軽く壓する代りに両手の指頭を用ひて軽く摩擦するも宜しい。此場合には両手を充分に揉み或は摩擦するもよし。然る後に治療を初めるのである。併し如何なる場合に於ても患部を揉む様の事をしてはならぬ。何故なれば哲理治療は決して按摩の代用法ではないからである。唯指先にて軽く觸るゝ丈けに止めて置かなければならぬ。

時に由つては皮膚病の如き不潔にして手を觸る事の出来ない場合もある。又之れに觸るれば患者が苦痛を感じる場合も尠くないのである。斯る場合には患部に直接觸れずして唯其場所を摩擦する真似のみを爲すも、其效力は之れに觸れたると同一である。例へば睡眠中の小兒の治療を爲す場合は如きは其必要が度々あるのである。何故なれば小兒が睡眠中之れに觸れば直ちに目を覺ます泣き出す面倒がある。夫れ許りでなく小兒に由つては知らぬ顔の人が己に觸るゝを嫌ふと云ふ様な事は常に目撃する處である。

摩擦の真似

治療の時間

眠ればよい

次に治療に要する時間はどれ位でよいかと云ふに之にも一定の制限はない。病の性質、病の状態、治療の期間、その他急性慢性等の相違に由つて、治療の上には多少の斟酌を加へねばならぬ。急性の病は成可く早く治療して、出来得れば一回の治療に由つて、全快せしむるが如く、治療を加へなければならぬ。或は一時間、時には二時間も休まず治療しなければならぬ場合もある。斯る場合には患者の自然に眠る迄治療すれば、大抵は一回の治療に由つて全快するものである。

慢性の病はさう云ふ風には行かない。短時間數回の治療をなす方が反つて有効の様に見える。通常は一回十分乃至二十分位が適當である。夫れも患者の性質、治療者の熟練不熟練に由つて、精神統一に要する時間に長短があるから、之れも一概には云へない。極めて練習の積んだ治療者なれば、三分や五分位にても充分有效なる治療が出来るものである。

今試みに哲理療法に關する、大體の方式を説明すれば、大要下の如きものである。

治療の大體の方式

- 一、先づ目を軽く閉ぢて思想の統一を行ひ次に
- 二、病人の姓名を思念するのである其次に
- 三、病名即ち病氣の種類を思念するのである肺病、神經衰弱、脚氣等。
- 四、一時に數種の病に犯され居る場合は同時に之れを思念して同時に治療を施せばよいのである必ずしも一つの病に就て各別の治療を施す必要はないのである。

鈴木美山氏の
哲理解療法の缺

以上は鈴木氏が哲理解療法を通じて教授する要點である其他鈴木氏の通信講義録中に治療上に何等の必要な宗教めきた事が書いてある前掲の氏の説中患者が自然に眠る迄行へば效ありと云へるは眞であるさうなればならぬ故に患者が睡眠でなく催眠をしたならば大效がある道理である睡眠をして終へば術者の念力がよく感應せず又は全く不感應に終る然るに催眠であれば念力はよく活潑に感應する故である又前掲の治療の方式中に姓名を思念すると云ふことは無意義である姓名は何でも其人の心身に就て思念せなければならぬ筈である日本全國には同姓同名の人が數

千萬人ある點に氣附かざりし説で治療の本義に缺けて居る又數種の病を一度に思念すると云ふ點も道理に合ない其れでは充分の精神の統一が行はれざる道理である此治療法では實地に研究した上に主張するものと思はれぬ感がして鈴木氏の爲に惜むべきである殊に病氣は無いとの根柢に立て病氣を癒すとは矛盾も甚だしい病氣なる者が此世に無ければ治療の必要な筈である病氣が有ればこそ治療が必要である。

第三章 古屋鐵石式哲理解療法

遠隔催眠法の
原理

講述者の行ふ哲理解療法は催眠遠隔治療法の應用である故に詳細は同卷を參照せられたいが之を略述しますれば先づ術者は患者の前に相對して正坐し患者は座しても椅子によりても平臥し居ても可いが深呼吸をして居る術者は患者の身體に始終少しも手を觸れずして患者の兩手は舉ると強烈に念力を凝めると患者の兩手は舉る其手は下ると念力を凝すと其手は下る又術者の念力だけにて患者の手を活潑に舉げさしたり下さしたりする

患者の心身を
左右する力ある
療の質が擧る治

其他念力丈で患者の五官の感覺をも左右することもある斯る感應ある程度となりしとき術者は姿勢を正して精神を統一し患者の患部は癒ると強烈に念力を凝すのである然ると其術者の精神にて患者の肉體が左右せらるゝ如く病氣も左右せられて癒るのである哲理療法を行ふも少しも患者に何等の感應がない法では無効である術者の念力のみによりて患者の手を左右するところが出來ず實驗的感應を少しも現すことの出來ない法では治療の効は不確實である相當に患者の心身に實驗的感應を有せしめ得る法でなければならぬ何等の實驗的感應をも與ふることの出來ない法では其名ありて其實がない哲理療法を行ひし者で催眠術療法を行ひし者でない故に何等の反應が患者の身體に現はれざるも効がある、と云ふは方便である其方便を信すれば信じたる人には効力がある心に信じたる通りに肉體は變化すると云ふ心身相關の理に依つていある其れを信ぜず疑ふ人には少しも効なきは當然である。

催眠術療法では患者を隨意不隨意思ふ儘となすことを得るは勿論人格を

眞に效ある哲
理療法と否と
の區別點

變換して人間を動物とし老人を小兒とする如き作用を持つて居る斯る偉大の作用を持つて居る故重症も確かに根治せしめ得る道理である純然たる催眠術療法は哲學科學及び神學の應用によりて病氣を癒す法である然るに講述者が云ふ哲理療法は單に哲學を應用して行ふ催眠術應用の哲理療法である故に純然たる催眠術療法とは其療法の原理と範圍とを異にしてゐる純然たる催眠術療法は哲學の外に科學及び神學の應用が加はりて居り、又其應用範圍が非常に廣い。

第四章 雜誌記者の批判せる哲理療法

精神療法のことには就ては局外者と見るべき雜誌「向上」の記者は公平の見地に立つて鈴木美山氏の哲理療法を論評してゐる左に其の要點を摘出して之を示しませう。

「鈴木美山氏の著健全の原理」に現はれた美山氏の哲學思想は決してさう徹底したものではない：訪問の結果は：誰でも私の失望を以て無理だと

哲理療法に就
て雜誌「向上」
の批評

鈴木氏著健全の原理の誤謬

病氣は非實在なりとは方便とすればよい

思ふ者はないであらう。哲理療法は多くの非難を免るゝことは出来ない、『健全の原理』を哲學上から見るときは物と心の區別の間に彷徨し、心霊界に於ける自然法を以て道徳であるとする所は何うしても徹底したる見方として許す事は出来ない。又哲理療法の基礎は病の非實在なるを信ずるにあるといふけれど、病の非實在である言葉は曖昧な言葉はないのである。病は非實在である。病は決してさういふのではない。唯健康の破れた状態を指して病と呼ぶのであるといふのは好い。然し乍ら一步を進めて病の非實在なることを信ずることによつて、病は治療して了ふと説いたならば、これを推し進めると、不死の説にまで至らなければならなくなる。死は非實在である。死と言ふものがあるではない。唯生のない状態をさして死と云ふのである。故に死の非實在なるを信ずることによつて、人は永久に不死であることが出来る。と云は、如何か。

斯く言へばとて吾人は決して鞏固な精神のよく病を撃退し得るものであることを否定するものではない。否寧ろ十分に信じて居るものである。思ふ

誤解の種子

に病の非實在なることを説くのは、斯くの如くにして病を撃退すべき強固な精神を興ふる方便ではないか。暫く之れを其の方便として許すも、それは自己の病を撃退して、其の健康を増進することにこそ大に効果あれ、之れを人に施すことが出来るとは何う言ふ理由か。此に於て精神の交通といふことを説かなければならぬ。様な窮策に陥るのである。徒に難解なる哲學の名を借つて、愚人を欺くものであるとせらるゝも、何うして能く辯解することが出来るよう、殊に『健全の原理』中に擧げてある實例に見るも、その證據の漠然として居る點に於て、呆然たらざる得ないである。

之を要するに、美山氏の所謂健全哲學は治療法の看板を掲げて、醫者の仕事に代らんとする時、或は世間に非常な誤解の種子を蒔くものではないかと、吾人は心から憂慮するものである。之れは向上の記者が美山氏を尊敬し、憂慮するの餘り、其誤謬を指摘し、注告したるものかと思ふ。

精神の統一を圖るに其道理を解いた書物を読み、理論を明かにして其目的を達せんとし、如何程讀書しても精神の統一が圖られぬと云ふ人がある。眞

議論は精神
は統一せぬ

に徹底した研究をすれば自在に統一が圖られませうが生嘴みの理論は却つて害をなし統一の妨げとなる場合が多い精神統一の修養は學問知識は第二として第一は信念によらねばならぬ信念と云へば或る一宗教を信ずる必要がある様であるが宗教は何でもよい神佛は何でもよい神或は佛に向つて祈禱し精神を集注し心を散亂せしめぬ様にすると信念は自然に高まりて意思は強固になる信念を神又は佛の偶像の上に寄せて禮拜するのは偶像に神佛の靈が實在するのではない信念を表象する方法として偶像を禮拜するのである神佛を尊ぶ意思を之によりて高むるのである其れを私わたくしの治療室には金色燦爛たる像が祭つてあり術者も患者も之を禮拜し祈禱します世人中偶像を禮拜するは迷信で愚夫愚婦のなすべきことで知識階級の人々の笑ふ所であるなどと云ふ者もあるも其れは半知半解の誤説である其反對者其人の像を造り其像を足で踏み附けたら像の本人たる反對者は如何の感がするか其像に禮拜したら如何の感がするかに思ひ當らぬ人である。

偶像を拜する
は統一せぬ

第十八卷 靈智學隱秘教療法

第一章 靈智學隱秘教療法とは何ぞや

靈智學の意義

靈智學(シオンフイ)とは神聖な知識の科學といふ意味で西曆第三世紀にア
ンモニアスサツカスといふ人がこれを創設したそれは一つの絶対無上の
神靈即ち無限の眞體が一切宇宙の根本であるとの信念に基き人の本心は
この無限眞體の光から發する一つの光線であつて従つて宇宙靈魂と同質
で永久不死であるとなし且つ無限眞體の力が種々なる自然現象の裡に隠
れてゐて一見不可思議な作用をする所の自然の秘密を明かにし又殊に人
間に隠れた靈精の力を研究する學問であるさうして此の學問を普及させ
る爲に『世界同胞及び靈智學會』といふ會が起され人種の如何男女の區別階
級の如何及び信仰の如何を問はず人類の起原は一なり宗教の起原は一に
して智惠教なる永久眞理より出發するとの根據からこれらを統一調和し

智惠教

て世界同胞の主義とし、人生の活動力たらしめんとしてゐるのである。本部は米國カリホルニヤ州ポイントローマに在る。

隱秘教(オツカルチズム)とは靈智學の秘密的方面を獨立させたもので、物質的及び心靈的の自然界に隠れた秘密を信じてこれを行ふ教である。それは現今の科學からは迷信とし、荒唐無稽とせられるやうな不可思議の術である。けれども例へば印度の有名なカラバと云ふ隱秘教者は、月夜の景色を繪にかいて、その月が光を放つて畫面の空を東から西へ渡つたと云ふやうな事をやつて見せた隱秘教では、それは今日の科學にてはまだ説明し得るだけに進歩してゐないのであつて、我が教こそ將來の科學を包含するものであると主張して居る。催眠術も出現の當時學界は大騒ぎをしたが遂に今日では承認された。此の如く隱秘教に屬する秘密現象は、追々に承認せられるであらうと信じて居る。

第二章 靈智學隱秘療法を行ふ法

靈智學隱秘療法
養法術者の修

靈智學は秘密

靈智學隱秘教では昔の聖人が行ふたと傳へられる奇蹟神術の如き行を否定しない、死者を立たせる事すら出來ると信ぜられてゐる。これ等の術を學ぶのは靈智學隱秘教の密部に屬する事であつて、靈智學隱秘教の重要な一つの目的が人間の精神的及び物質的のあらゆる苦しみを除く事にあるから、病氣治療の事には専ら力を盡してゐる。身體の苦痛を除くには先づ心を清淨にしなければならぬ。そして又他人を治療する程の力を得んには、自分勝手な目的や野心や自慢心があつては成らない。これらの人間が治療能力を得ると、それを悪用して邪法となす恐れがある。故に靈智學に於てはその技術方面の事は飽まで秘密にし、まづ顯部に入つて充分に靈智學の目的と同化した上でなければ之を教へない。

靈智學隱秘療法を行ふ法は、秘密に附しありて之を公に傳へず、併し講述者が推察したる所を不完全乍ら左に其大意を申しませう。

術者は先づ總ての慾心を去り、何人をも救ひたい、助けたいとのみ心掛け、て神を常に禮拜し、自己の精神を宇宙靈と同化し得る様に修養し、後に治療

に着手するのである、即ち人は一個の人間としての統一した精神を有して
 るも、大にすれば元宇宙靈魂の一部分である、身體を構成する各部分器管
 細胞に至るまで、またそれらに一個の精神を持つて居るも、皆宇宙靈魂の
 一部分である、これは印度哲學では昔から説き來つた事であつて、また最近
 の科學に於ても又之を承認せんとしつゝある、隱秘療法はこの事實に基
 き總て病氣は無限の眞體の眞意に反することである、そこで宇宙靈魂と同
 化した健全な精神を具へ居るものが、不健全なる病人の靈魂を同化矯正し
 て健全とするのである、隱秘療法は術者の靈を宇宙靈と同化せしめ、術者
 の靈力を偉大ならしめ、患者の心靈を動かし以て病氣を治癒せしめるので
 ある。

暗示するに非
 ずして命示す

宇宙靈と心靈
 との働きで愈

隱秘療法にては暗示療法法の原則を應用して、手を使用するけれども、其
 は從であつて、主とする所は術者の精神を以て患者の心靈の働きを喚起し
 健全ならしむるのである、術者が患者の身體の患部に向つて、或は言葉に現
 はし、或は心中に於て次の如く命ずるのである、君の心靈よ君の心身の行爲

は過つて病氣となつた、心身は其の過ちを改めて正しきに返らなければな
 らぬ、君の心靈は君の患部を癒し器管を完全にする責任がある、患部は絶對
 無上の心靈無限の眞體の力によりて健全になると命示するのである、是は
 勿論一例であつて、術者は此例に倣つて何病をでも癒すのである。

術者は無限の眞體の力によるのであるから、莊嚴な態度口調で、或時は説諭
 し、或時は嚴命するやうにし、根本に於て愛情を失つては成らない、亦其患部
 によつて種々に其の手段を代へ、それに應じて命示方に手心を變ふべきで
 ある。

尙解し易からしめんが爲に、隱秘療法にて、胃病を癒す法を申しませう、先
 づ患者をして術者の面前の椅子によらしめ、或は寢臺に仰臥せしめ、胃の患
 部は宇宙靈魂の力によりて癒ると言葉に出し、或は心中にて唱へながら、術
 者の掌で軽く胃の部を撫でつゝ、胃は是まで職分を盡すことを怠り居つ
 たが、これよりはその機關を活潑に働かして、良く食物を消化し、全力を營養
 せしめると命示するのである、一度の治療時間は三十分時間で、日に一度宛

胃病を愈す法

異宗教を嫌ふ弊害

行へば輕症は一週間重症は三週間にて大抵全治する、その他何病でもすべ
 て是に準じて、病患ある部分に術者の統一したる念力を以て、宇宙靈を傳へ
 るのである、たゞ成功を確實ならしむるには、患者が敬神心に富み、術者の力
 量とその方法の偉大なることを確信せしめるとよい。

世界同胞及靈智學會の目的書の中に左の意味の文が見えました、本會は同
 胞主義を以て自然界の一事實とし之を證明し、人生の活動力となすにあり、
 本會は往古及近世の宗教科學哲學及び美術を研究し、天然の法則及人間の
 靈性を考究するに在り、本會は何人を問はず、眞に同胞を愛し、大古より人
 種及び宗教の差異より生ずる人類發達の阻害を除去せんと欲するもので
 ある、又眞理を愛し物慾の一次的歡樂に勝れる高尚なる精神を求め、靈智學
 をして人生の活動力たらしめんと努むる人は、來れ、本會はかゝる人に活動
 の機會を無限に與ふるものである、云々と見えた、其中「私の最も感じた
 るは、宗教の差異より生ずる人類發達の阻害を除去せんと欲する」の句であ
 る。

大正七年十二月二十日印刷
 大正七年十二月三十日發行



著作人 古屋景晴
 東京市芝區琴平町三番地

印刷人 中野鏝太郎
 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社
 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所

精神研究會

東京市芝區琴平町三番地

電話新橋一八七五番
 振替口座東京三三五一番

精神療法研究家必讀珍書

古屋鐵石先生著 上製 八拾錢 並製 五拾錢 送料八錢

大珍書

秘密獨習 成功確實 女催眠術

口繪 女催眠術家が不思議の實驗をなし居る處の寫眞版數個挿入

此催眠術は精神療法
研究の根柢にして被
術者を一佛道に云ふ
人合一、神教に云ふ
眞如法性、基督教に
云ふ見神の狀態とな
すにあり。

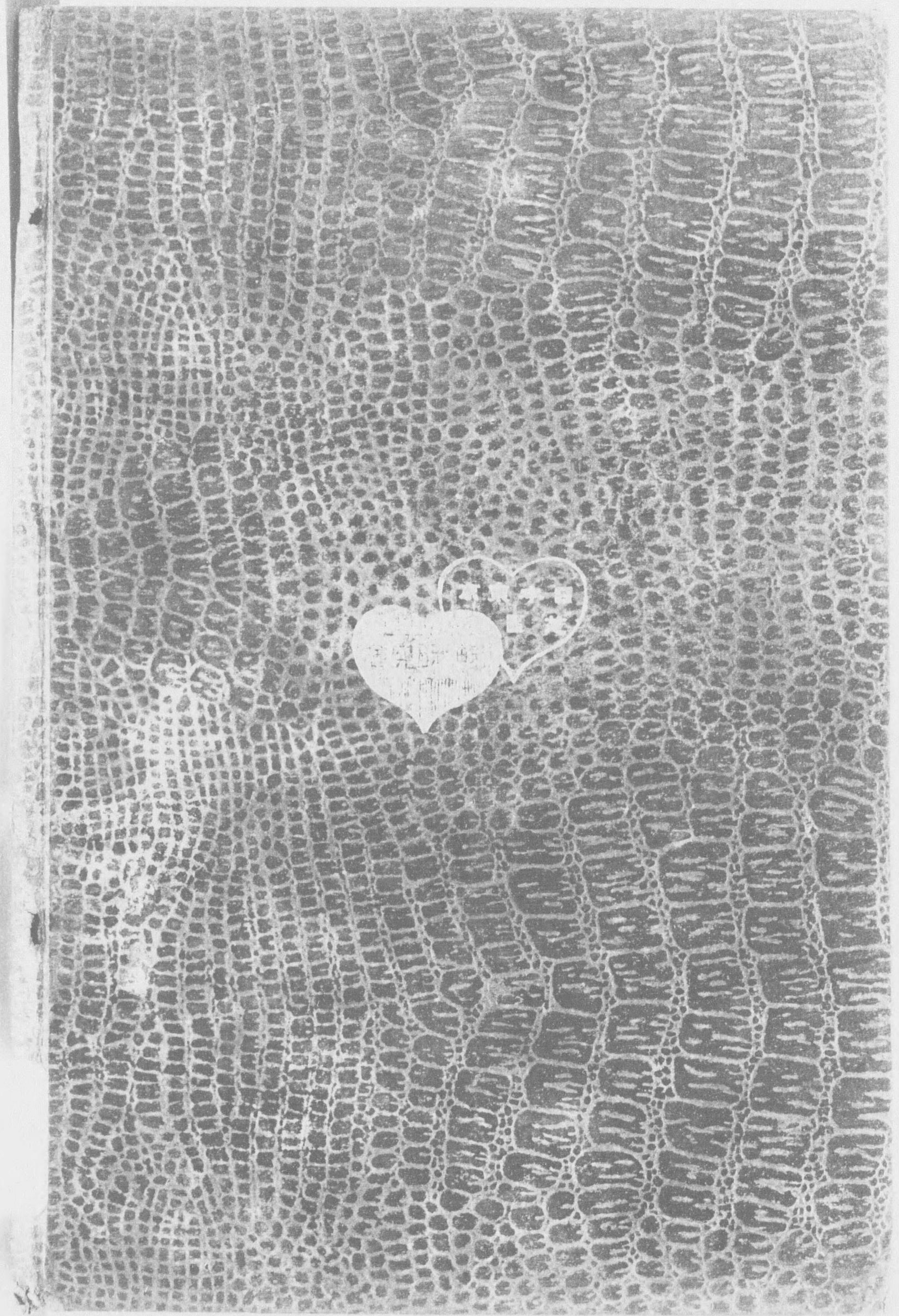
著者多年研究の結果、最近の發見になれる進歩せる催
眠術を婦女子と雖も秘密に自宅にて獨習し、催眠術療
法を行ひ得る根柢を簡易に秘訣を講述せり、殊に精神
的の慰藉と人格の修養とに力を濃き婦女子に關する面
白き問題を解説しあり、讀んで面白き事不思議なる事
小説以上なり。

(精神療法の根柢)

此書は各種精神療法の根柢を解り

150
170





終

